

比較農業技術研究会(東南アジア大陸部稲作圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較：「京都大学東南アジア研究所国際共同研究拠点Ⅱ型プロジェクト」)

第2回研究会議事録

月日：2016年9月30日（金）

時間：14：00～17：20

場所：東南アジア研究所東棟1階会議室

内容：アウトラインの発表

参加者：小坂、柳澤、松田、安藤、内田

---

発表の内容要旨（発表者本人による）は以下の通り

小坂康之

「ラオス北部の在来稲作における農業技術と水田植物相との関係」と題して報告した。飯沼二郎の世界農業類型論では、湿潤地域は「除草農業」に区分される。また日本では「農業は雑草とのたたかい」ともいわれる。一方でラオス北部の在来稲作水田では、イネと競合する野草が少なく除草が行われない筆もあった。また複数の水田野草が食用とされ、自家消費だけでなく市場でも販売されていた。水田野草のうち食用となる種は、栽培野菜と同じ総称「バック」と呼ばれ、食用とされない野草「ニャー」と区分されていた。このような水田野草と農家の関係は、近代農学における「雑草」の定義にはあてはまらないものである。討論において、水田野草の生育にはイネの草型、移植の間隔、中干の有無も関係すること、水田内のハビタットの多様性、水田の開拓史と水田植物の変容、ヨーロッパの農業との比較、農業近代化が浸透する契機、外来植物の増加の原因などについての意見がだされた。

---

松田正彦

「ミャンマー・エーヤーワディーデルタ稲作の技術展開：農業生態・対ハザード・開発の観点から」と題して、研究テーマ案のアウトラインを報告した。2008年のサイクロン災害（ナルギス）によるイネ収量減の回復過程には顕著な地域差がみられ、それらは一般的な被害分布と一致しない。たとえば人的被害や家屋損壊が激しい地域でも減収がほとんどみられない村もあるなど、両者の相関関係が弱い。本研究ではデルタ内の生態環境の相違とそこで発達した稲作技術の特徴を明らかにしたい。それにより上述の現象の説明を試みる。報告後の議論では、品種や水利技術を含む稲作技術の詳細、村の歴史と技術蓄積（耐塩性品種の有無など）の重要性が指摘された。また、沿岸部では塩水侵入を防ぐ目的だけでなく天水を貯留する目的の小規模な堤防が築かれることもあり、これが排水を困難にしている可能性もあるとのコメントもあった。中央政府や開発 NGO の関与や普及技術の変化にも着目する。

---

柳澤雅之

「ベトナム紅河デルタ」

ベトナム紅河デルタの新デルタ上にある村落（ナムディン省タインロイ村）を対象に、1950年代以降の農業変容を、集団農業のユニットであった合作社と土地、農業機械化を軸にして検討した。その結果、（1）1950年代末から60年代初頭にかけての農業集団化と合作社の形成、（2）1981年に始まる生産物請負制と土地の分散錯圃、（3）1993年の土地分配と合作社の役割の変容、（4）2000年代以降の工業化と機械化の進展が、村の農業生産を規定する制度上の重要な画期として存在することがわかった。（1）の時代には、ベトナム戦争を背後から支える農業・農村の維持に合作社が機能したこと、また、ソ連による援助を受けて、紅河デルタ全体に大規模な水利改修事業が実施され、区画整理事業が進み、現在に至る農業基盤が形成されたことがわかった。集団農業の時代に、農業近代化の掛け声のもと、耕運機がすでにこの時代に導入されたものの、肥料は堆厩肥と緑肥が主体で、生産量は多くはなかった。（2）の時代には、農業生産の請負の単位が生産隊であったにもかかわらず、実際には世帯単位で請け負われた。農業生産が食糧生産にとっても家計収入にとっても重要であったため、農地は水稻生産力によって5段階に等級化され、細分化してでもそれぞれの条件の土地を世帯ごとに利用できるようにする平等原則が働き、その結果、世帯ごとの耕作地は細分化された。（3）の時代には、耕作地の長期使用権が保証され、合作社は一般に、解体の方向に向かった。しかしタインロイ村では、合作社はジャガイモ保冷库を利用したジャガイモの生産・保管・販売事業を開始するなど、合作社が主体となって農家世帯の重要な収入源を確保した。また、水稻生産面でも、高収量品種の導入や化学肥料の多投により、収量が（3）の時代の2倍ほどにも増加した。また、畑地で造成する折衷苗代の造成や短期種の導入などにより、土地集約化も進展した。（4）の時代には、村から7 kmほど離れたナムディン市郊外に、2003年に建設された工業区の影響が顕著となった。すなわち、村の若年労働者が、村を住居としたまま工業区に通勤する形態の出稼ぎが盛んになり、農業労働力が不足するようになった。その結果、耕作地を細分化することはむしろデメリットとなり、2013年の国レベルの交換分合時には、世帯あたり2から3筆に例外なく縮小することができた。この時代はまた、収穫・乾燥に大型コンバインが導入されるなど、機械化が進展する時期となった。

---

次回第三回の研究会は

10月28日（金） 10:00～12:00

発表者 安藤和雄、浅田晴久

場所：未定（後で通知）